

エドゥアール・グリッサンと『アコマ』(3)

中 村 隆 之

はじめに

本論は「エドゥアール・グリッサンと『アコマ』」という題名のもとに発表してきた論考の続編にして完結編である⁽¹⁾。

対象は、グリッサンが創刊した雑誌『アコマ』である。同誌は、1971年4月から73年4月にかけて、計5号4冊が刊行された。これまでの2本の論考では同誌創刊号から3号までを扱った。今回は、最終号に当たる4-5合併号を扱う。同誌からの引用に際しては、これまでと同様、Aと略記し、文中に、復刻版のページ数（すなわち創刊号から最終号までの通し番号）を併記する。

第2回目の論考の小括で示したとおり、筆者は『アコマ』を、「カリブ海性」の実現のための実験場であった、と捉えている。この雑誌の際立った特徴である人文学系の論文は、「カリブ海性」を実現するための諸条件を多角的に示してきた。雑誌における学術的な考察は、マルティニックを主たる事例にしてカリブ海の歴史・文化・社会を研究するためのいわば基盤構築だった。この作業を主導するのは、グリッサンと「マルティニック学院」（以下、IMEと略記）のメンバーである。また、『アコマ』は、同じIMEメンバーを中心におこなわれる、展覧会、映画上映、演劇といった文化フェスティバルを報告する場でもあった。

1971年から刊行された『アコマ』は、当然ながら同時代の思潮、とりわけ〈68年5月〉における「文化的なものは政治的なものである」というメッ

セージを共有していることは、雑誌の構えから十分に察することができた。とくに同誌2号のロベルト・マッタのインタビューが示すように、想像力が現実を変革していくという意味での「文化革命」の理念を、グリッサンとIMEメンバーは分かち合っていたと言ってよい。

ところが、その希望を誌面から感じとれるのは、3号までである。第1回目の論考で書いたとおり、当初は季刊誌を目指して刊行された『アコマ』が予定通りの刊行ペースを保てたのは2号までである。2号(1971年7月)と3号(1972年2月)のあいだは約半年開き、3号から4-5合併号(1973年4月)までは、ついに1年2ヶ月のブランクを空けることになる。『アコマ』は4-5合併号を、一時期の休刊を挟んだ再出発のように捉えたが、結局、合併号をもって廃刊となってしまう。

したがって、最終号は、これまでの方向性を展開させつつも一種独特な調子を帯びている。それはグリッサンがのちに刊行する『カリブ海序説(Le discours antillais)』に通底する悲観主義的な調子であると同時に、現状を拒絶しようとする徹底した批判でもある。

1 第4-5合併号の目次と構成

悲観的な論調を印象づけるのは、雑誌の冒頭におかれ、時事問題を扱う「出来事」欄である。「出来事」の最初のページは右側に印刷されており、その見開き左側には、定期購読を薦める文面が掲載されている⁽²⁾。

1年以上のブランクを挟んで改めて刊行されたものが合併号であることを考え合わせると、定期購読を薦める告知にもかかわらず、編集部がもはや雑誌をこれ以上刊行できないと予想していたことは、想像にかたくない。そして、財政問題は、『アコマ』の運動を支えようとする読者層を求めることが予想以上に困難だったことを、端的に物語っている。そのことがまた「出来事」欄の論調に影響しているのは間違いないだろう。

1-1 「出来事」なき「出来事」

「出来事」欄は、第2号は1971年5月のマルティニックのデモを、第3号ではアメリカ合衆国の刑務所に収監された黒人同胞に関するニュースを、それぞれ題材としてきたことから明らかなように、時事問題を取りあげながら、これを巻頭言としてきた。最終号の巻末に付された「ブラジル問題の資料(Le dossier brésilien)」はその点で、内容においても分量においても、「出来事」欄で取りあげてしかるべきものである。

「ブラジル問題の資料」は、政治文書である。軍事独裁政権下のブラジル国家が親米反共路線の政策をとるなかで、共産主義者、トロツキー派、カトリック左派といった革命勢力が激しい弾圧にさらされている状況が告発されている。

これは、短いながらも、『アコマ』がアメリカスの文化と政治を積極的にフランス語圏の島々に紹介しようとしてきたことを示す重要な文章であるものの、雑誌全体のなかではまるで付け足しのように末尾に置かれてしまっている。これは推測にすぎないが、じつはこの文章は、当初は「出来事」欄で紹介するつもりで書かれたのではないか。この文章には珍しく1972年9月という日付が入っているように、最終号が刊行された1973年4月の段階では時期を逃してしまったとも考えられる。

そのことと関連していると思われるのが、この号の「出来事」欄であえて「出来事」が扱われていない点である。のちに『カリブ海序説』第22章「出来事」に改稿のうえ再録されていることから⁽³⁾、記名がないもののグリッサンが書いたことは明かであるこの文章は、以下の問いかけから始まる。

われわれマルティニックの人間にとって何が出来事なのか。他所で、われわれとは無関係に起こったことであり、にもかかわらず(だからこそ)、ここと、われわれに影響を与えること。そのことによって、世界で起きるがここでは起きないことがわれわれを世界から孤立させている。(A, p.445)

この辛辣な問いかけに見られる論理に着目してみると、この時代のグリッサンが「他所 (ailleurs)」と「ここ (ici)」の空間的対比を強く意識していることが分かる。「ここ」のうちに「他所」が響く、あるいは「ここ」が別の空間から見たら「他所」となるという、グリッサンの詩学を特徴づける例の着想はいまだ見られない。いずれにしても島の外で起きていることを、そのまま受容するだけでは「われわれ」にとっての「出来事」とは言えないのではないか、という根本的な問いである。これが「ブラジル問題の資料」が「出来事」として該当欄に位置づけられない理由ともなっている。

みずから表現しない民にとって、精神的に隷属する民にとって、あれやこれやの出来事など存在しない、あるのはただ非-歴史のみだ。みずからと関わるどんな決定にも、どんな成熟にも立ち合っていない、ということだ。(Ibid.)

この主張は、「出来事」欄を設けてこれを批評的にレポートしてきた『アコマ』の方針をラディカルに突き詰めたものと受けとることができる。そして、「出来事」欄に記述する内容としては一度しか書けないものであることから、グリッサンが『アコマ』廃刊の可能性を十分に念頭に置いた文章であり、覚悟をもって書いたものだということが伝わってくる。もうひとつ、この文章から伝わるのは、性急さである。それはいくつかの打ち間違いにも示されているが⁽⁴⁾、これが『アコマ』としての最後の試みになるだろうという予測があるからこそ、これまでのなかで現状批判の姿勢をもっとも強く打ち出そうとしたと考えられるだろう。

マルチニックにおける「出来事」の不在は、グリッサンの考えでは、「文化」の不在でもある。彼によれば、「文化的行動はここではアンティュー人によって導かれなければならないだけでなく、システムに対抗するものと

の文章は、グリッサンの創作を掲載した第3号をのぞき、マルティニックの外に在るアメリカスの書き手によるものである。

その点を確認したうえで、以下、最終号の目次を概観しておこう。

- ①「出来事」(pp. 3-4)
- ②ガストン・ミロン「教育への申し立て」(pp. 5-15)
- ③エドゥアール・グリッサン「文化的行動と政治的実践——基礎提言」
(pp.16-20)
- ④エクトル・エリザベット「マルティニック文化の社会学への寄与」
(pp.21-38)
- ⑤ユベール・フォンテーヌとIME グループ「討論」(pp.39-48)
- ⑥エドゥアール・グリッサン「言語的錯乱について——マルティニックの
現状のシニフィアンとしての「日常の」言語的錯乱の研究への導入」
(pp.49-68)
- ⑦エクトル・エリザベット「民衆層における言語的錯乱の調査の試み」
(pp.69-83)
- ⑧エドゥアール・グリッサン「事前調査についての覚書——シュフランの
場合」(pp.84-92)
- ⑨マルレーヌ・オスピス「説得のメカニズムについて」(pp.93-103)
- ⑩研究グループ有志「代表イデオロギーについての覚書」(pp.104-106)
- ⑪アルレット・ジュアナカレア「詩」(pp.107-115)
- ⑫ジャン・メテリユス「一件落着」(pp.116-119)
- ⑬レミー・アンセルム「デュヴァリエ現象——その意味作用」(pp.120-
149)
- ⑭ジャン・パジェ「フェレール紹介」(pp.150-151)
- ⑮ホアキン・フェレール「デッサン」(pp.152-154)
- ⑯ジョルジュ・ゴディ「海外県における農業の統計とその役割」(pp.155-

168)

- ⑰「アメリカ黒人諸協会へのインタビュー」(pp.169-175)
- ⑱ジュリス・シレニクス「黒人フランス語作家の作品における合衆国のイメージ」(pp.176-185)
- ⑲「書評」(pp.186-202)
- ⑳「第5回IME フェスティバル」(pp.203-205)
- ㉑「ブラジル問題の資料」(pp.206-208)
- ㉒「注記」(p.209)

まず、はっきりとということは、今号では2号分の特集が組まれている点である。その1つは、「文化的行動と政治的实践」(③、④、⑤)である。もう1つは、「マルティニックにおける言語的錯乱」(⑥、⑦、⑧、⑨、⑩)である。

文学作品は⑪、芸術紹介は⑭、⑮と少なく、大部分は人文学にかかわる記事である。そのなかで、⑫と⑬がハイチの政治状況を、また、⑰と⑱が合衆国の黒人問題をそれぞれ取りあげている。これらは、基本的には『アコマ』の従来の方針を引き継ぐ「カリブ海性」への志向を示している。

以下、簡単に各記事について触れておくと、②は、ケベックの詩人にして独立の闘士であるガストン・ミロン(Gaston Miron, 1928-1996)の文章の転載(抜粋)である。自伝と詩的要素が交錯する散文であり、疎外を主題にした錯乱した独白である「疎外された錯乱者」、ケベックの「植民地化された状況」を自覚し、深い苦悩を経て、独立派の闘士である詩人として自己形成を遂げる過程を独白する「長い道のり」、記憶が錯綜して(再び)錯乱に陥っていく自己を描く「誕生の記憶喪失」の3つのパートから構成されている。グリッサンの『カリブ海序説』や『奴隷監督の小屋』(日本語訳は『痕跡』)といった作品と問題意識においてきわめて近い文章である。

③から⑩まではIMEメンバーによる共同研究の記録である。㉒によれ

ば、「文化的行動と政治的实践」と「マルティニックにおける言語的錯乱」は1972年に行われたセミナーに基づいている(A, p.651)。

⑪のアルレット・ジュアナカレアは、第2号に引き続き、本号でも詩を発表している。今回の詩は、視覚的効果を狙っていることから、手書き原稿のまま掲載されている。『アコマ』編集部による導入文は、その詩の意義を「(アイデンティティと結びつく)言語の在り方を模索するためのカリブ海の生体験への予備過程」(A, p.549)のようなのだと紹介している。

⑫の著者ジャン・メテリウス(Jean Métellus, 1937-2014)はハイチ出身の作家であり、詩、小説、評論など多岐にわたるジャンルでハイチを題材とした著作を残している。メテリウスは、デュヴァリエ政権下の1959年にフランスに移住した。⑫は、デュヴァリエ政権と悪名高いハイチの民兵組織「トントン・マクート」に関する著作を題材としている。⑬もまた、その表題にあるとおり、「デュヴァリエ現象」を論じた長文の記事だ。著者レミー・アンセルム(Rémy Anselme)は、⑫によれば、マルティニック住民を調査するハイチ出身の社会学者であり、フィスク大学(テネシー州ナッシュヴィル)で人類学分野の研究助手をしている、とある。

キューバの芸術家ホアキン・フェレールについては、カマチョを紹介した第3号で触れられていた。フェレール紹介の⑭の著者ジャン・パジェ(Jean Paget)に関しては、⑫の著者紹介欄に略歴が記されていないものの、パジェの著作の略歴などを見ると、この人物が主に芸術分野で活躍した書き手であることが分かる。

⑯の著者ジョルジュ・ゴディは、マルティニック学院に集う若手研究者の1人であり、すでに創刊号に「17世紀から20世紀に至るマルティニックの砂糖経済の変遷」を発表している。今回の論考は、海外県の農業を統計的見地からまとめたものであり、論文というよりも資料的性格が強い。

⑰は、創刊号から一貫して確認できる合衆国の黒人問題に関する記事であり、とりわけ第2号掲載の「アメリカ社会における黒人大学の役割——アメ

リカ黒人学生へのインタビュー」に続く、インタビュー企画第2弾という趣きである。マルティニックを訪れた「アメリカ黒人学生同志」たちが語るというのは、前回と同じシチュエーションであるが、今回のものは1972年6月に記録された。

⑱もまた、『アコマ』誌のなかでは⑰の問題関心と結びついている。編集部注記には「アメリカの大学人が、アメリカの現実に抱くフランス語黒人作家のヴィジョンの解釈をつうじて、どのようにフランス語黒人作家を見るのか」(A, p.618) ということの記録とある。著者ジュリス・シレニクス(Juris Silenieks)は、「シェンリー・パークの大学」(ペンシルヴァニア州ピッツバーグ⁽⁶⁾)で教えるアフリカ系黒人文学の専門家であり、特にセゼールの『キリスト王の悲劇』とグリッサンの『ムッシュー・トゥサン』についての論文を発表していると㉒に紹介されている。1981年に『ムッシュー・トゥサン』の英訳が刊行されたさい、シレニクスは序文と注を担当した。

⑲の書評に続く㉑は1972年に開催された第5回マルティニック学院の芸術フェスティヴァルについての記事であり、ハイチの民衆歌がうたわれたり、ラテンアメリカの映画が上映されたり、マッタによるポスター(おそらくはフェスティヴァルの告知ポスター)がフォール＝ド＝フランスとラマンタン市の壁に貼られたりしたことなどが報告されている。

1-3 書評欄の検討

前回の論考で、書評担当者は基本的にはIMEに関わる若手研究者であり、取り上げられる書籍はカリブ海に関わる近年刊行されたものだ、と書いた。この原則は最終号でも変わらない。

扱われている書籍は、掲載順に、ユジェーヌ・ジェノヴェーズ(Eugène Génovèse)の『奴隷制の政治経済』(1968年)、アーヴァン・マーチ(Arvin Murch)の『黒いフランス人(Black Frenchmen)』(1971年、英語の原書)、ジャック・コルザニ(Jack Corzani)の『カリブ海百科事典 第1巻 文学

(詩)』(1971年) および『カリブ海百科事典 第2巻 文学(散文)』(1972年)、ヴァンサン・プラコリ(Vincent Placolý)の『マルセル・ゴントランの生涯』(1971年)、エミール・ヨヨ(Emile Yoyo)の『サン＝ジョン・ペルスと語り部』(1971年)である。

書評担当者は、ユベール・フォンテーヌ、ヨレーヌ・ド・ヴァソワーニュ(Yolène de Vassoigne)、ジュリエット・エロワ＝ブレゼ、マリヴォンヌ・シャルルリー(Maryvonne Charley)、フィリップ・モンジョリ(Philippe Montjoly)、ロラン・シュヴェローロである。

最終号の書評においてとくに重要であるのは、年長者シュヴェローロによる「言語活動の詩的なものと政治的なもの」と題された、エミール・ヨヨ『サン＝ジョン・ペルスと語り部』への長文の書評である。ヨヨの本作はサン＝ジョン・ペルスと、クレオール語を始めとするカリブ海との関係を主題とした画期的な評論である⁽⁷⁾。刊行間もなくシュヴェローロがこの評論をたいへん好意的に取り上げていることから(対してジャック・コルザニの文学研究についてはジュリエット・エロワ＝ブレゼが辛辣に批評している)、サン＝ジョン・ペルスへの関心がIME関係者のなかで高かったことがうかがわれる。シュヴェローロは、カリブ海の詩人としてのサン＝ジョン・ペルスというヨヨの視点を引き継ぎながら、エメ・セゼールとの比較を試みている。書評の枠を超えてそれじたい評論と呼べるその文章で、シュヴェローロは「サン＝ジョン・ペルスは、その言語活動(とその記述的な語彙)に着目するさいには、よりカリブ海的であって、むしろセゼールのほうが西洋的であるのかもしれない」(A, p.642)という、逆説的な指摘をしている⁽⁸⁾。

2 共同研究「文化的行動と政治的实践」の紹介と分析

この共同研究のパートは、③、④、⑤から構成されている。1日のセミナーの記録と考えると、グリッサンとエリザベットの文章はともに口頭発表原稿だと考えるのが自然である。

2-1 グリッサン「文化的行動と政治的实践——基礎提言」

このセミナーの問題設定を確かめるうえでも、まず冒頭の一文を紹介しておきたい。

文化的実践(生産、構造、イデオロギー)と呼ばれるものと政治的行動との関係は、マルティニックの現状の分析から出発するか、せめてマルティニックの現状への一般的視座から出発することなしには、解明しえないことである。そのようなわけでおのずと以下の2つの問いが提出される。なぜ、文化的生産の実践がある時期には優先されなければならないのか。一つ、文化的生産という実践は、政治的实践を支える、ないしは中継するべきなのか。(A, p.458)

何度も繰り返される「実践 (pratique)」「行動 (action)」「行為 (acte)」といった用語はここでは厳密に定義されているのではなく、相互に置換可能な表現として用いられている点をまずは指摘しておきたい。重要なのは、いずれの語彙も、主体が働きかけ、実施するという、能動的な意味で使用されている。また、「文化」にかかわる「実践」とは、「生産、構造、イデオロギー」と言い換えられている点も注目すべきだろう。グリッサンは「実践」のうちに「構造、イデオロギー」を新たに作りだす(あるいは旧来のそれに抵抗する)という意味もまたおそらく込めているのだろう。

その「基礎提言」としてグリッサンは3点述べている。

第1点はマルティニックの「社会諸階級の非-自律」である。この考えは、植民地化以前から続いていた伝統社会との対比によって示される。伝統社会の場合、植民地支配後、その抵抗が社会内部に残っているが、マルティニックのような奴隷制社会の場合には、そもそも最初から植民地主義によって徹底的に破壊されたところから出発している。「生産様式」を決めているのは

社会内部から生まれる集団ではなく「フランス帝国主義者」(A, p.459)であるがゆえ、マルティニック社会はそもそもその成り立ちから「疎外」されている。グリッサンはこの状況を「構造的疎外 (alinéation structurelle)」と呼んでいる (Ibid.)。

グリッサンの考えでは「反乱」や「抵抗」はこの(押しつけられた)構造それ自体を転覆しうるものとして組織されないかぎり「構造的疎外」から脱却することは不能であり、したがって、そのように組織されずにきたマルティニックにおける「反乱」もまた不全に終わらざるをえない。

この「構造的疎外」を刻印されたマルティニック社会における諸階級は、結局のところ、自律していない。島内のベケと中産階級との対立という構図さえすでに宗主国フランスの手中にあったのであり、中産階級がベケに勝利をして「同化」を得たときには、すでにフランスは植民地からの搾取を強化する階級を作りあげていた、とグリッサンは分析する。「要するに、生産システムを転覆すること、ただそれだけがマルティニック社会の構造的無秩序に対して有効に戦うことができる」(A, p.460)。

第2点は「植民地主義としてのエリート政策」である。グリッサンは「マルティニックの植民地政策がエリート層を生み出すという実践をシステム化した」(Ibid.)と述べる。そして「エリートが生産様式とは一切無関係であること」、「したがって自分たちを生み出した人間に反旗を翻すことが永久にできないということ」がこの政策の「究極的な成功」(Ibid.)だとする。このため、エリート層(中産階級出身)のイデオロギーとは「文化、法律、権威、作法といった、中央権力に由来するもの」(A, p.461)を躊躇無く受け入れることであるという。

第3点は「精神的貧困」であり、これは「われわれの議論には重要だと思われる」とグリッサンは述べる(この点が当時において今日的な現象だという意味だろう)。彼の考えでは、1945年以降、いわゆる貧困は、比較的豊かな階層が生じたことなどによって、相対的には減少傾向にあるものの「モ

ラルの頽廢の深刻化」を引き起こしている (A, p.462)。グリッサンの見立てでは、この問題もまた生産や社会階層に関する分析が適用できる。つまりは、「適切さの喪失、技術的責任の欠如、生活面の墮落」(Ibid.) などがあり、こうした精神的貧困が集団面での「明確な展望の不在」(Ibid.) とも関わっている。

以上、「マルティニックにおけるあらゆる文化的行動」(Ibid.) は、これら打開すべき3つの問題を考慮に入れるべきだというのがグリッサンの提言である。

2-2 エリザベット「マルティニック文化の社会学への寄与」

グリッサンの文章に続くのが、エリザベットの原稿である。A「問題設定と理論的枠組」B「階級の問題」C「エリートの問題」D「植民地の問い」とそれぞれ題された、計4節から構成されているこの論文は、グリッサンの観点を応用して具体的に論述するというスタイルをとっている。BからDまでの節は、グリッサンの3つの提言に順番通りに対応している。

Aの「問題設定と理論的枠組」ではマルティニック文化の社会学的研究にあたって、いくつかの理論的な視座を弁証法的に提示している。最初にエリザベットは、上部構造／下部構造について、下部構造決定論から出発するのではなく、上部構造をなす文化の研究が重要であることを確認している。そのうえで、文化を構成する諸要因を社会と歴史の関係のなかで捉え、特殊と普遍との弁証法的な構図のなかでマルティニック文化を研究する構えを示している。そしてこの3点を組み合わせた視座から、グリッサンの3つの提言をそれぞれ考察することが表明される。

B「階級の問題」は、したがってグリッサンの「社会諸階級の非-自律」に関する考察に相当する。ここで念頭に置かれているのは、マルクス主義における革命への発展段階的図式である。階級の対立によって歴史が展開してゆくという大きな見取図のなかで、資本主義期にブルジョワ階級が形成され

ことで、プロレタリアとの対立が起こり、革命（共産主義）に至るという
ような弁証法的で普遍主義的な見取図が、マルティニックのような植民地社
会では機能しない理由を考察している。その考察は基本的にはグリッサン
のそれを発展させるものである。また、この節で興味深いのは、フェルナ
ンド・オルティスの「トランスキュルチュラシオン (transculturation)」
(A, p.468) への言及である⁽⁹⁾。この概念は、ある一方の文化が他方の文化
を取り入れるという「アキュルチュラシオン (acculturation)」を経験する
一方で、その領有を通じて自文化を喪失するという「デキュルチュラシ
オン (déculturation)」をも経ることをも含み込んでおり、新たな文化を創出
するダイナミズムを示している⁽¹⁰⁾。この概念はのちにグリッサンが語るクレ
オール化 (créolisation) の議論を先取りするものであるが、ここでの力点
は、「トランスキュルチュラシオン」には他文化の吸収という肯定的契機
のみならず、自文化を失うという否定的契機も含まれているということである。
この概念は「言語的錯乱」をめぐるエリザベットの原稿のなかでも参照され
る。

C「エリートの問題」では「有色自由人」(ムラートなどの中産階級)が
知識階層を形成していったさいにフランスのブルジョワ階級の共和主義をは
じめとする「フランス文化」を規範化し、それに模倣していった結果、「県
化」が推進されたという、マルティニックにおけるイデオロギーの歴史的帰
結が確認される。

D「植民地の問い」は、「明確な展望の不在」というグリッサンの指摘を
受けて、「マルティニックにおける国民の問い (question nationale) にま
つわる諸問題」、端的には、「国民文化」が形成されないことをめぐる考察で
ある (A, p.476)。エリザベットは、マルティニック社会がカリブ海・ラテ
ンアメリカに連なる地理的条件と、フランスとの関係で西欧化を志向する傾
向があることの二律背反を指摘し、階級問題やエリート問題を踏まえつつ、
「国民の問い」を多角的に深める必要性を提言する。

2-3 フォンテーヌとIMEグループ「討論」

このパートは、グリッサンとエリザベットの報告を受けた討論の記録である。IMEメンバーのうち、ユベール・フォンテーヌ、マルレーヌ・オスピス、エドゥアール・グリッサンの発言が収められている。

フォンテーヌは、導入として、2人の報告にあった3つの問題（階級形成の不全、植民地政策としてのエリート層の出現、国民的な実質の不在）をそれぞれ再定式化（伝統文化の不在、社会階級形成のための「(原初的)蓄積」不能、人格喪失）する。そのうえで、「政治的なもの」、「経済的なもの」と実践面では同じ重要度で考えるべき「文化的なもの」の「基軸」とは何か、という問いを提出する。

議論は「文化的なものの基軸 (axe du culturel)」をめぐる展開する。

グリッサンはこの問いについて4つのことを述べる。1つは「文化的なもの」は、システムにとって、戦略的な支配の仕上げの段階に位置づけられるものがある。このシステムによる「文化的なもの」の支配への対抗。2つめは、システムによって都合の良い「フォークロア化」（異国趣味、地方趣味として他者に消費されるものとしての「フォークロア」）への対抗。3つめは「普遍文化」を称するあらゆる「イデオロギー」の拒否。4つめは「理論の蓄積」であり「文化的なものの基軸について最も重要なこと」だと述べる(A, p.483)。そのさい、グリッサンは「アプリアリな定式ではなく、マルティニックの社会・歴史的現実への分析に適用されるならば、マルクス主義理論はここではたいへん有力である」(A, p.484)と述べている。

このパートにおいて興味深いのは、報告と議論を受けて、「文化的行動」を実施するIMEグループとしてどのような実践が可能か、大きく2点に分けて提案を出しあっている点である。まず1つは共同研究面におけることとして、「(エリート主義に対抗して)共同研究の大衆化、創作作品の政治的観点からの使用、弁証法的な文化的／政治的行動と「実施計画」の問題、文化

的行動の中心の複数化（フォンテーヌの視点）とその連携」（A, p.485-6）。もう1つの戦術面・技術面においては、「（映画や演劇などの）ランガージュの問題」という、模倣的であったり、特徴を欠いたものに陥ったりしないで、いかにして表現するかという問題や、これに関連して技術の習得の必要性や、公的な回路の外に、文化的実践のために必要な構造（学校や出版流通体制や芸術家のアトリエなど）をどのように作りだすべきかという問いが検討されている。

この他に、もう1つ、オスピスとグリッサンのあいだで交わされる、関連する別の討議が収められている。この議論では、マルティニックでの疎外と経済構造の変遷との関係と、独立というスローガンをめぐって発言が交わされる。後者については、「自治（autonomie）」というスローガンが唱えられる現状にあって、むしろ「独立」を唱えるべきではないかというオスピスの意見に対し、グリッサンは、スローガンよりも、独立の内実を重視する。独立が「民衆の行為から生じるのではなく、エリートが決めるものであるならば、そこから帰結する矛盾を解消する唯一の手段は、マクート主義となるだろう」（A, p.488）と予想するグリッサンは、同じく、「プロレタリアの歴史的使命を唱えるだけでは不十分」であり、マルティニックの現状に則した分析に基づく必要性を説く（Ibid.）。オスピスが言及する「自治」については、1971年8月に取り交わされた「モルヌ・ルージュ協定」を念頭に置いていたことは時期的に見て間違いない⁽¹¹⁾。最後に、この後の議論の補足として、グリッサンは左派系政党のスローガンのパターンとマクート主義との関係を図式化して説明している。

2-4 『カリブ海序説』への再録部分の確認

この共同研究において『カリブ海序説』に再録されているのは、③である。これは同書第38章に「文化的行動」と改題のうえ、再録されている⁽¹²⁾。また、⑤の「討論」の部分は、フォンテーヌの導入の文章をのぞいた発言部分

が「文化的行動」の章内に組み込まれている。グリッサンの原稿と、グリッサンを中心とした発言部分だけが著作に収められていることから、IMEの共同研究の要素は見えにくくなっている。

3 共同研究「言語的錯乱」の紹介と分析

この共同研究は、⑥から⑩までの計5つの原稿から成り立っている。共同研究「文化的行動と政治的实践」と同じく1972年のセミナーの記録であることから原稿は基本的には口頭発表したものに基づいている。先んじてこの構成を説明しておけば、グリッサンの最初の原稿が理論的枠組みの提示であり、それに続く4本の原稿は理論的枠組みで提示された各テーマに特化している。

この研究は、マルティニック社会が植民地支配の「最高段階」にある、というこれまでの考察の上に築かれている。グリッサンの考えでは、支配が明確に感知することのできなくなったマルティニック社会は、その成員が人格喪失した「異常」社会である。その「異常性」は、たとえば人々の日常的な言語事象に頻繁に見られることである。では、「異常性」をどのように分節化し、言語化することができるのか。これがグリッサンを中心とする共同研究の出発点だと言ってよいだろう。

3-1 グリッサン「言語的錯乱について——マルティニックの現状のシニフィアンとしての「日常の」言語的錯乱の研究への導入」

グリッサンのこの最初の原稿は、共同研究の理論的な基盤をなしている。グリッサンは言語面での「異常」を「言語的錯乱 (délire verbal)」と名付けている。さらにそれが社会全般に蔓延しているのが「常態」であるという意味を込めて「日常の言語的錯乱 (délire verbal coutumier)」と呼ぶ。「日常」における「言語的錯乱」は、グリッサンの考えでは、全面的に疎外された社会における「異常性」の兆候だということになる。すなわち、全面的に疎外されることに由来する諸矛盾は、表面的な社会活動の場 (グリッサン

の言葉では「明瞭な場 (champs manifeste)」よりも、むしろ、潜在的な、無意識的な場において表出するというのが、グリッサンの仮説である。

潜伏の場 (champ du latent) (無意識の場?)。ここでは社会的総体の非解決が不均衡として活発化し、激化する。日常の言語的錯乱はそのようにして何よりも「普通の」形態のひとつをなしている。(A, p.495)

また、次のようにも述べている。

われわれがフランス語を自ら選択するマルティニック人というものを考えるなら、マルティニック人共同体は心的変調を代価とするかぎりでフランス人として認められうるのであり、その心的変調のもたらす日常の言語的錯乱は、たとえば「心的変調の」「埋め合わせ」の表れとして捉えることができるのである。(Ibid.)

グリッサンによれば、この日常の言語的錯乱は、結果として、これまでに述べられてきたようなマルティニック社会の「構造的疎外」に起因している。その克服ができないかぎりはこの兆候が解消されることはないが、しかし、言語的錯乱の分析を通じてその問題の所在を明らかにすることにより、政治的实践が早められるだろうとグリッサンは考える。また、言語的錯乱は、エリートと民衆ではその意味合いが変わって来るとも指摘する。

そのうえで、グリッサンは言語的錯乱の諸特徴を「技術的」特徴と「イデオロギー」特徴の双方に分類し、さらにそれらの特徴が、「コミュニケーション型」「演劇化型」「代表型」「説得型」の4類型のなかで見られることを確認する。

これらの一連の分析を経て、グリッサンが下す暫定的な結論が興味深い。ここで、これまでほとんど話題とならなかった「病的錯乱」、すなわち病理

学的に「狂気」と判断される錯乱が話題となる。そもそも社会が「異常」である状況のなかで「狂気」と診断される錯乱とは何か。グリッサンはこの視点からむしろ「狂気」のほうに肯定的な意義を認める。上述の分類において、一般に「狂気」のように見られる日常の言語的錯乱は、「演劇化型」のみだという。そして、これ以外の形態は、「非-適応」をすべて示しているのに対して、「演劇化型」は「再-適応」を求める試みだという。注意しなければならないのは、グリッサンが「現実の彼岸」にってしまった「病的錯乱」と、その手前でとどまる「演劇化型」を区別し、後者に積極的意義を見いだそうとしている点である。「演劇化型錯乱は歴史による苦悶なのであり、これに対してその他の日常の錯乱は歴史への不参加あるいは歴史の拒否を示している」(A, pp.507-8)。

3-2 エリザベット「民衆層における言語的錯乱の調査の試み」

エリザベットのこの原稿は、その題名にあるとおり、非エリートとしての民衆層の言語的錯乱の調査に基づいている。まずエリザベットは、個人の病因は社会における構造の変化(トランスキュルチュレーションによる新しい文化の導入と以前の文化の喪失)による不適応である点で、個人の症例は社会(集団)の諸問題と相関していることを一般論として確認する。そのうえで、マルティニックに関する言語的錯乱の研究の有用性を2つの点から示す。第1にマルティニックはもともと口承の伝統のうえに成り立っている社会である、ということ。第2にマルティニックの言語状況が公用語としてのフランス語と、公用語としては認知されていないがコミュニケーションのさいにもっとも話されるクレオール語との言語的優劣関係のなかにある、ということである。人々の日常言語であるクレオール語が客観的に抑圧され、公式の場面ではフランス語が尊重されるべき言語として使用されるという状況が、社会的病因が言葉を通じて表出することを示しているのではないか、ということである。そのさいに重要となるのは、1) 第一次産業の衰退(サトウキ

び生産)におけるマルティニック社会構造の第三次産業化に伴う農村部から都市への人々の流入、2) 民衆層の経済的貧困、3) 黒人文化は悪く西洋文化は良いものだとする文化的価値観である。

エリザベットが調査対象とするのは、グリッサンの論考における言語的錯乱の区分けのうち、民衆層の「コミュニケーション型」の錯乱である。日常の場面(市場、バス、広場、カーニヴァル)で無作為に録音をし、それを解読するという作業を経て明らかになったのは、錯乱のなかで現れる主な話題は、社会的地位、超自然現象(呪術に結びついたもの)、セクシャリティである。また、話は論理的な脈絡がなく展開され、一般的には人がたくさんいる場所で確認される。

最後に、エリザベットはなかでも特徴的な事例を4件紹介している。1) バスの中で男性が3人(うち1人は女性)に話しかけ、肌のもっとも明るい男を「ドクター(医師)」と呼んで自分は出所したばかりだと金銭をせがみ、その後、3人が金持ちだと言い募り、そのうちに女性にからみ、自分は1年間女性に触れてないことを言いたすが、物乞いは無駄だと分かると捨てぜりふを吐いて立ち去った。2) 政治集会の場面で、最初は静かに聞いていた男性が突然、ドゴール、ポンピドゥー、セゼールの名前を出しながらクレオール語で悪態をついた。3) バスのなかで婦人が、満席であるのがわかると自分が働き詰めで、子供が5人もいたいへんだから座ることを主張し、子供たちの自慢、とくにフランス帰りの子供の自慢をはじめた。4) 軽食の売店で明らかに軍人の白人の若者2、3人が給仕の女性に言い寄っているのを見たマルティニック人男性がこの若者たちが注文したものを買っていなくなったあとにその給仕の女性に軍人たちに関心をもつのはやつらが白人だからだと言い募り、女性の抗弁も一切聞かずに売女呼ばわりをして立ち去った。以上の4つの事例がマルティニック社会の諸問題を反映していることを事例にそくしてそれぞれ解釈を加え、1つの調査報告としてこの論考はあえて結論を出さずに閉じられる。

3-3 グリッサン「事前調査についての覚書——シュフランの場合」

これは、先立つグリッサンの原稿「言語的錯乱」のなかで演劇化型の事例として言及された「ハム教理の創始者エヴラル・シュフラン」(A, p.503)の発言や著述を対象として「演劇化型錯乱」の特徴を分析したものである。すでに確認したとおり、グリッサンは錯乱の四類型、すなわちコミュニケーション型、演劇化型、再現型、説得型のなかで、周囲から狂気と見なされる演劇化型を「歴史による苦悶」を示したものとして特別視していた。その根拠となるのが、「言語的錯乱」の演劇化型の事例研究のように見せる、この原稿である。

シュフランはラマンタン市を所在地とする新興宗教「ハム教理」の創始者である。グリッサンは「ビラの形で作成されたシュフランのテキスト、彼との議論の録音、ハム教の儀礼を書きとめたもの」(A, p.526)を素材とし、その特徴を12のカテゴリーに分類して説明したのち、この演劇化型の錯乱は、マルチニック社会状況の「政治的明確化(責任をもつ共同体として、歴史的記憶を取り戻し、状況に適応した生産構造を再獲得し、共同体を取り巻く環境との絆、共同体を構成する個人間との絆を新たに確立した上で、未来を統べる共同体となること)」によって解消されるのであり、「今日この演劇化に捧げられている活力を様々な具体的使命のなかへ急き立てるだろう」(A, p.531-532)という。

他方、グリッサンは、シュフランの事例研究から得られた演劇化型の諸特徴を、他の類型の諸特徴と比較し、これを比較する図を示す。とくに説得型と代表型に見られるエリートの言語的錯乱と民衆層において見られる演劇化型との原理的差異をグリッサンは強調する。

3-4 オスピス「説得型のメカニズムについて」

オスピスの4類型の整理によれば、コミュニケーション型は「社会实践の

具現」、演劇化型は「文化を創造する欲求に応えようとする失敗の振舞い」、代表型は「社会の組織および機能」、そして説得型は「イデオロギー」とそれぞれ言い換えることができる。この論考で取りあげられるのはエリート層に見られる説得型であり、題材に用いられるのは政治文書である。この説得型の特徴は右派でも左派でも見られるが、具体例に挙げられるのは「マルティニックの政治ステイタス変更の是非をめぐる右派の声明文」である(A, p.538)。

この声明文が目指すのはマルティニックの海外県のステイタスの現状維持を目指すものであり、フランスとの紐帯の重要性を喧伝することにより、自治派や独立派を批判することにある。そのさいに引き合いに出される論拠のうちに、オスピスは、ヒューマニズム、現実主義、良識といった説得型の特徴を見る。また、この文書は歴史意識についてもフランスを理想化するあまりに奇妙なねじれを抱えており、本来、左派の共和主義に位置付けられるべきヴィクトル・シェルシェールをヒューマニストとして礼賛している。説得型錯乱はフランス語の使用と結びついており、クレオール語は抑圧されることになること、また説得型は代表型が進展したものだという指摘もなされている。

3-5 IME 研究メンバー有志「代表イデオロギーについての覚書」

言語的錯乱をめぐる共同研究を締めくくるのは、代表型錯乱に割かれた、メンバー共同名義による文章である⁽¹³⁾。これまでの原稿に比べると短いこの文章(『カリブ海序説』に再録されていることから主要な執筆者はグリッサンだと考えられる)では、代表型の特徴が3つ指摘されている。1) この錯乱の形態が見られるのはエリートと中産階級であり、とくに公務員、自由主義的職種の人間、小学校教師などの、フランス本土(宗主国)の権力に従属する職種である。2) この錯乱は権力の戯画の表れである。エリートと中産階級は自分たちを民衆の代表だと思い込むものの、彼らの批判は決して本土

には向かない。本土は現地の植民者と民衆のあいだの利害を調整するようなものとして捉えられてきたからである。またこの階層が主導する闘争は本土の政治的文脈に依存しており、民衆の代表としては機能しないできた。3) 代表型は知の戯画でもある。彼らは「本土への同一化と統合の道具、すなわち文化、言語、歴史、伝統を所有すること」(A, p.548)を目指す、この場合は既存の文化を否認することを目指しているためにパロディのようにしか達成されない、と指摘される。

3-6 『カリブ海序説』への再録部分の確認

まずグリッサンの⑥は、「「日常の」言語的錯乱について」という題名のもと、加筆修正を加えたうえで再録されている⁽¹⁴⁾。同様に⑧は同名のまま、やはり加筆修正を伴ったうえで再録されている⁽¹⁵⁾。エリザベットとオスピスの原稿が『カリブ海序説』に収録されていないのは当然のこととして、⑩は「(代表イデオロギーについての覚書)」と改題されてほぼそのままのかたちで再録されている⁽¹⁶⁾。

『カリブ海序説』の再録部分は、2-4で指摘したことと同様、共同研究という側面が見えにくくなってしまっている。とりわけ共同研究の5本が緊密な構成をとっていたがゆえに、その2本が欠けることで「言語的錯乱」の研究の総体が見えなくなってしまう。言語的錯乱の4分類のうち『カリブ海序説』で個別に取り上げられているのが演劇化型と代表型である理由は、『アコマ』における共同研究の全貌を知ることによって初めて理解できる。

このように『カリブ海序説』では「言語的錯乱」をめぐる議論は不分明になってしまっている。しかしその一方で、シュフランの「ハム教理」の9つの文書が『カリブ海序説』の巻末に資料として付されており、⑧にかぎっては、グリッサンの分析の企図が『アコマ』のときよりも明確化したという側面もある。

4 ハイチの存在感

最終号の主要部分は以上の2つの共同研究であるが、もう1つ、⑫と⑬というハイチに関する記事が2本収録されていることにも着目しておきたい。第3号ではシュジー・カストールの「アメリカによるハイチ占領」が掲載されていたように、『アコマ』はハイチについて並々ならぬ関心を寄せていたことがわかる。とくにこの間、独裁政権を布いてきたフランソワ・デュヴァリエ (François Duvalier, 1907-1971) が死んだことが大きい。政権は息子のジャン＝クロードに引き継がれており、その点では切れ目なく続いているが、とりわけレミー・アンセルムの長大なフランソワ・デュヴァリエ論 (マルレーヌ・オスピスの合衆国の黒人文学論に次いで長い論文) はこのタイミングで書かれるべくして書かれたと言える。

4-1 メテリュス「一件落着」

1-2 で確認したとおり、著者ジャン・メテリュスはデュヴァリエ政権下の1959年にフランスに移住している。パリで医学 (1970年) および言語学 (1975年) の博士号を取得するメテリュスは、のちに詩人・小説家として活躍していくことになる。この論考は、アメリカ人のジャーナリスト2名による『パパ・ドックとトントン・マクート——ハイチの真実』(英語からのフランス語訳、1971年⁽¹⁷⁾) を扱った書評の体裁をとっている。4頁ほどの分量ということからも、当初は書評欄に掲載される予定のものだったのかもしれない。なお表題はこれから見るとおり、本の著者たちに対する皮肉である。

この時期、ハイチ人民がデュヴァリエによる独裁とその残虐なトントン・マクートによって痛めつけられていることが、メディアや映像をつうじて、フランスでも多数紹介されていた。そのことを冒頭で喚起したうえでメテリュスは、『パパ・ドックとトントン・マクート』がこうしたフランスのメディアの一面的な報道をそのまま本にしたようなものである、という。この

本や報道全般が繰り返すのは、デュヴァリエ政権の圧制であり、蔓延するマクート主義（macoutisme）から抜け出せないハイチ人民という構図である。教育の不全を強調し、人民の抵抗を過小評価することにより、『パパ・ドックとトントン・マクート』は、ハイチ人民が親子二代にわたる独裁を受け入れるしかないという結論を述べるにすぎない。ハイチ人との本当の対話を試みずに、表層的なルポルタージュによって書き上げた本だというのがメテリュスの評価である。

メテリュスは、アメリカ合衆国によるハイチ軍事占領時代からデュヴァリエ政権成立までを連続的に捉える視点をこの論考で示している。このため、デュヴァリエ政権の誕生により、以前から存在した恐怖政治の傾向がより強化していったわけだが、反デュヴァリエの抵抗勢力はハイチ国内にはつねにあり続けている。デュヴァリエにしろ、この本の著者たちにしろ、そうした国内の抵抗運動をみくびっているのだが、その過小評価のうちに独裁政権打倒の希望をメテリュスは見出そうとする。

4-2 アンセルム「デュヴァリエ現象——その意味作用」

アンセルムの論考は、ハイチ民衆層の大半が部分的であれ全的であれ「デュヴァリエ主義」を支持するという状況下で、デュヴァリエという人物が体現する政策（これをアンセルムは「デュヴァリエ現象」と呼ぶ）を主題としている。欧米人は独裁政権下の状況を見て「ハイチ人（ときに黒人）は自己統治能力がないのだ」（A, p.563）というレイシズム的な発言をするが、それを反駁する意味も込めた研究である。

デュヴァリエが政権に就いて以降、政敵や反対者が暴力的に排除されている。しかし、独立後のハイチ政府が政権維持のために軍隊や警察をこれまでも用いてきたことを考えれば、デュヴァリエのやり方もハイチの統治の伝統を引き継いでいる、ということになる。さらにはハイチ人のなかでデュヴァリエによって投獄されたり殺されたりした身内をもたない人間は1人もいな

いだろう、とアンセルムは言う。問題は、にもかかわらず、なぜ支持をするのか、ということである。

この「デュヴァリエ現象」の基盤となるのは、建国の父と称されるジャン＝ジャック・デサリーヌ (Jean-Jacques Dessalines, 1758-1806) への信奉を柱とするナショナリズムである。このナショナリズムは、黒人とムラートのあいだの対立構図のなかで、自分たちは黒人であるという意識をもち、西洋の技術と知識を信奉するという特徴をもつという。デュヴァリエの主張は、このナショナリズムに根拠をもつものであり、黒人とムラート間の歴史的対立を解消するためには黒人の政治家が政権を奪取し、黒人エリートが生み出されるべきだ、とするものである。したがってデュヴァリエは、これまでの歴史的経緯を担うかたちで大統領に選出されたのであり、この点でデュヴァリエ現象とは彼の個性に還元されない一個の社会現象である。

アンセルムによれば、黒人とムラートという肌の色に基づく社会階層化はカリブ海全般に見られることだが、ハイチでは人口の20%以下を占めるムラートは自分たちがヨーロッパ文化に属していると思うことを好み、アフリカ的な文化を軽蔑している。反対に、80%以上を占める黒人はその外見と文化からヨーロッパ人からは遠く、むしろアフリカ人を新世界で体現する存在であるという。これはハイチ革命以前の歴史に遡る対立である。トゥサン＝ルーヴェルチュール捕囚後、ナポレオンは1803年に奴隷制復活を決めた。黒人とムラートを奴隷とするというこの決定がデサリーヌのもとで両集団を団結させて独立を達成させたが、デサリーヌはその後、島内にいた白人のほとんどを虐殺する。これによりムラートと黒人とのバランスが変わり、再びムラートが黒人に対して優位に振舞っていくようになり、現代までその対立が維持されていくようになった。

1946年、ムラート政権の失墜を、中産階級に属する黒人知識人が利用し、黒人による政治の道を開いていく。そのなかでもっとも成功したのがダニエル・フィニョレ (Daniel Fignolé, 1913-1986⁽¹⁸⁾) とデュヴァリエ博士によ

る「労働者・農民運動」(Mouvement ouvrier-paysan)だった。こうした政治活動の一方で、デュヴァリエはロリメール・ドゥニ(Lorimer Denis, 1904-1957)と共に「デュヴァリエ主義」という黒人中産階級のイデオロギーを打ち立てる。この「デュヴァリエ主義」の理論を実践にうつしたものが「デュヴァリエ現象」である。この現象がもっとも効力を発揮したのは1957年から69年までのデュヴァリエ体制の最初の12年間であり、その後はこの現象を支えるイデオロギーが時代後れになっているとアンセルムは診断する⁽¹⁹⁾。

デュヴァリエ主義とは、先述したムラートと黒人という2つの人種＝階級からハイチ社会が成り立っていると見なし、肌の色の明るいムラートのほうが優れているという価値観を前提とする。アフリカは野蛮であり、ハイチは独立を達成しているからより開化している、といった偏見がハイチ社会に蔓延しているが、黒人大衆は、これらを捨て去り、アフリカの文化的遺産に回帰し、自分たちを再発見する必要がある。こうした黒人とアフリカを重視するのがこのイデオロギーの1つ目の特徴である。

2つ目の特徴は、大衆を先導することがエリートの使命であるという思想である。真のハイチ人エリートは自身のルーツを保持しながら西洋文明を吸収することができる(デュヴァリエ主義は、西洋由来の技術や知識を盲信する)。ハイチの歴史はムラートが担ってきたが、ムラートはブルジョワの支配者エリートだった。ハイチ人の大多数を占める黒人の側から出てくるエリートこそが本当に必要である。

このように、デュヴァリエ主義は黒人エリートが国民的大義をもって政治指導者となり、国家を動かしていくことを正当化するイデオロギーである。デュヴァリエ主義は文化的ナショナリズムを支柱としている。しかし、その主張を検証してみると、経済問題がほとんど扱われていないことがわかる。デュヴァリエ主義は精神論であり、黒人大衆の困窮を解決するような視点はない。つまり、これは国民には関わらない、黒人中産階級による特定のイ

デオロギーなのである。なお、こうした新たな黒人文化の創出や文化的ルネサンスといった視点は、同時代のアメリカスの知識人のあいだにも見られるが、デュヴァリエ主義に影響されているということは考えにくいという⁽²⁰⁾。

先述のとおり、「デュヴァリエ現象」はデュヴァリエ主義のイデオロギーを実践したものである。アンセルムによれば、この現象は、デュマルセ・エスティメ (Dumarsais Estimé, 1900–1953) 政権時代 (1946–1950) に遡る。「黒人を政権に」というスローガンのもとに大統領に選出されたのがエスティメである。エスティメ政権下ではムラートと協調する「真正派 (Authentiques)」という一派がある一方で、「失地回復派 (irrédentistes)」と呼ばれるグループがあり、黒人ブルジョワがムラートに取って代わることを主張した。「労働者・農民運動」から脱退したデュヴァリエが合流したのがこのグループだった。「真正派」と対立する「失地回復派」の若いメンバーのなかで、デュヴァリエとドゥニは「失地回復派」のイデオロギーを担う存在となっていく。1950年、ポール・マグロワール (Paul Magloire, 1907–2001) の軍事クーデタによってエスティメ政権が崩壊すると、「失地回復派」の指導者がいなくなる。そこで新たな指導者として認められるようになったのがデュヴァリエだった。こうして1956年、マグロワール政権崩壊によって、黒人中産階級からデュヴァリエ待望論が生まれる。

すなわち、1946年以降の政治的な潮流のなかで捉える場合、デュヴァリエが支持を集め、大統領に当選するのは自然な帰結だった。1957年の大統領選では、一方に、伝統的ブルジョワ (ムラート層) の権益を代表するルイ・ドゥジョワ (Louis Dejoie, 1896–1969) がいた。また他方には中産階級を代表する大統領候補が複数いたが、そのなかでもっとも支持を集めたのがデュヴァリエだった。したがってまず肝要であるのは、デュヴァリエは黒人中産階級の代表として大統領になった、ということである。

デュヴァリエ政権の文化面での政策は、一方でアフリカとの紐帯を強化し (ハイレ・セラシエをハイチに招待するなど)、クレオール語を「国民語」と

する反面、デュヴァリエをはじめとする政治家・知識人は依然としてフランス語を愛好し、スーツとネクタイを着用するのだった。

経済面の政策も文化面と同様の矛盾を抱え込む。政権就任後に経済問題に直面したデュヴァリエは、これまでの政権同様、アメリカ合衆国からの経済支援を取り付けることになる。「ハイチをハイチ人の手に」という初期のデュヴァリエ主義者のスローガンは忘れ去られ、サン＝ニコラ埠頭を合衆国の海軍に提供するなどした。植民地体制から続く経済構造をそのまま引き継いだまま、経済的な改革がなされることはなく、農村部の住民の生活向上をはかる有効な政策もとられなかった。

外交面ではデュヴァリエはハイチ国民の自律性を強調し、デュヴァリエ政権とは非友好的なイギリスやフランスに対しても外交上の関係を維持していた。ところが、合衆国のケネディ大統領（在任期間は1961-63年）はデュヴァリエ政権と交渉をせず、フアン・ボッシュ（Juan Bosh, 1909-2001）政権下の隣国ドミニカ共和国を引き入れながらデュヴァリエ体制の転覆を狙った。合衆国とドミニカからの外圧に抗するかたちで、デュヴァリエは権力の強化を図り、1964年、終身大統領宣言をおこなうに至る。この時点でデュヴァリエに対抗できる政敵は存在しなくなり、共産主義者など反体制を疑われる者は粛清されたり、買収されたりしていった。デュヴァリエ体制は、それでも新しい黒人中産階級の創出というデュヴァリエ主義を信奉する者たちに支持される。しかし、大統領の周辺の政治家は私腹を肥やすだけあり、ハイチ大衆を先導する役割としての中産階級という実態は生み出されないまま、デュヴァリエ主義が批判した当の対象であるはずのムラート階級のうちに同化していってしまう。

結論づければ、デュヴァリエとは「伝統的ナショナリズムの最後の代表者」であり、「その人生をムラート・ブルジョワ階級の解体に捧げたが、結局のところムラートの擁護者にして救済者として終わった」（A, p.591）ということになる。すなわち、自分で権力を掌握しながらも、ハイチ史のなか

ではムラート対黒人という構図を解体できぬまま、むしろ繰り返される歴史の1コマとなったかぎり、この人物もまた「歴史の犠牲者」(Ibid.)なのである。

小 括

以上、主要な記事を中心に4-5合併号の内実を検討してきた。合併号の中心にはこれまでの号と同様に、IMEメンバーによる共同研究がある。再確認しておけば、「文化的行動と政治的实践」は、政治的实践に先行するものとしての文化的行動の重要性を検証する研究だった。もう1つの「言語的錯乱」は、マルティニック社会で見られる言語的変調のうちに社会的問題を観察しようとする研究だった。拙論で繰り返してきたように、これらのうち、グリッサンが直接的・間接的に関わった原稿は『カリブ海序説』のうちに再録されているが、『カリブ海序説』においては共同研究として書かれた論考だという重要な意味合いがほとんど読みとれなくなっている。グリッサン研究において興味深いのは、演劇化型を扱った⑧の研究をはじめとして、言語的錯乱をめぐるこの時期の共同研究は、小説『奴隷監督の小屋』の構想と切り離すことができないだろう、ということである。この小説には狂人とされるさまざまな登場人物が出てくるが、これらの登場人物の言語的錯乱は、これらの共同研究を基盤としていてと考えてほぼ間違いないだろう。

また、エクトル・エリザベットがオルティスの「トランスキュルチュレーション」を援用していたように、共同研究をつうじて共有するアイデアの進展が認められるのも特筆すべきことだった。

最終号においてもアメリカスの文化や政治に対する並々ならぬ関心が誌面において示されていた。この観点からとくに重要な意義をもつのが⑫と⑬であったことはすでに検討したとおりである。とくにレミー・アンセルムのデュヴァリエ論は、欧米の視線から繰り返される独裁者像をハイチ史の観点から相対化し、ハイチ史の歴史的・政治的文脈を明確にしている点で、人文

学を標榜する『アコマ』誌を代表する論文の1つだと評することができる。

結 論

『アコマ』のプロジェクトは1971年に始まり、1973年、財政的問題から終了した。この間に誌面上に掲載された明確な共同研究は、「アンティューのいくつかの問題への導入」(1号)、「文化的行動と政治的实践」(4-5号)、「言語的錯乱」(同)の計3つとなる。また、これに準ずるものとして、IMEでの芸術と文化をめぐる討論会の発表原稿である、シュヴェロールのフォークロア論(2号、3号)およびグリッサンの演劇論(2号)とその実践にあたるIME劇団の「黒人史」(3号)が挙げられる。このように、『アコマ』は、すべての号においてIMEでの共同作業を基盤とするところに雑誌の特徴があった。

共同作業の理念は、カリブ海性の実現だった。「文化的なものは政治的なものである」という68年パリ5月革命の精神を共有するIMEのメンバーは、グリッサンに導かれながら、マルティニック社会をきわめて批判的に捉え、現況を超える方法を模索した。この点で『アコマ』の言論と思想は当初から先鋭的だった。雑誌の継続が5号で止まってしまったのは、逆説的ではあるが、グリッサンたちの先鋭性に由来していたからだ、と考えられる。IMEのメンバーが当時の大学院生を中心にしていたように、社会変革を目指す学生運動の潮流が『アコマ』を活性化させていったが、保守的なマルティニック社会においてIMEと『アコマ』の活動の支持者数に限界が出てくるのは必然だった。

文化面・政治面において、合衆国のアメリカ黒人のブラック・パワーや黒人文学、グリッサンとの交流のあったスペイン語圏の画家の紹介、ハイチの政治状況などを積極的に紹介する媒体であったことも『アコマ』の特徴である。このアメリカスへの着目もまた、カリブ海性の実現と結びついていた。

雑誌とは、運動体である。資金面での問題で廃刊となってしまったが、そ

の期間の限定がかえってこれだけの水準の高い誌面を維持することができたとも考えることができる。カリブ海のフランス語圏の雑誌という観点で捉えた場合、『アコマ』は、第2次世界大戦期に『トロピック』が果たした役割と同程度に評価されるべき媒体である。『トロピック』と『アコマ』では刊行された歴史的・社会的状況が異なるために誌面の構成だけを比較することは難しい。しかし、その点に一定の留保を加えても、『アコマ』がこれほどまでにアメリカスを志向していた雑誌であったことは強調せねばならない。それは単に、そうした主題の記事の量の問題ではなく、この雑誌のプロジェクトが当初から有する意思にかかわっている。

それは、すでに言うまでもなく、カリブ海性実現の意思である。『カリブ海序説』を着目するとき、この意思がエドゥアール・グリッサン個人に代表されてしまうことには、注意しなければならない。『アコマ』の共同作業は『カリブ海序説』の土台をなしている以上、そこに見るべきは集団の意思である。それが雑誌の中断を超えてどこまで持続していったのか。あるいはグリッサン自身はこの集団の意思の形成を IME の活動を終えたのちにどのように展開していったのか。これらの問いはいまだ開かれている。

注

- (1) 中村隆之「エドゥアール・グリッサンと『アコマ』(1)」『立命館言語文化研究』第27巻2・3号、2016年2月、189-205頁。同「エドゥアール・グリッサンと『アコマ』(2)」『立命館言語文化研究』第29巻4号、2018年3月、29-50頁。これらの論文の電子版は、立命館言語文化研究所の web サイトからオープンアクセスで入手することができる。
- (2) 第1回目の論考で引用した箇所を改めて引いておこう。「アコマは1年の沈黙の後に再刊された。われわれは、一貫した作業を妨げるこの中断を悔やんでいる。しかしこの号を遅らせたのはただ技術的ならびに財政的な困難のみである。雑誌が配給できるよう、定期購読をすることを願う次第である (A, p.444 ゴシックによる強調は原文)」。
- (3) Édouard Glissant, *Le discours antillais*, Seuil, 1981, pp.100-101.
- (4) この「出来事」には2つの、明らかな誤植が続く。« On peut discuter dme la

culture envoyée. On suppère qu'elle n'est peut-être pas adaptée ? » 下線部はそれぞれ « de » と « suggère » であることは『カリブ海序説』の同文の改訂版から確認することができる。グリッサン研究という観点からいうと、この誤植すらも恣意的だった、と読み込みたい誘惑に駆られる。のちに見るとおり、この号で扱われているのは「言語的錯乱」であるからだ。

- (5) 『アコマ』編集部の所在地の標記は、今号では、「ディディエ通り、1500キロ (1500km, route de Didier)」から「ボワ・ティボー通り (route de Bois-thibault)」に変更されている。ただし、ボワ・ティボーはディディエとバラタとを結ぶ通りであることから、同一の所在地である可能性が高い。
- (6) カーネギーメロン大学 (Carnegie Mellon University) のこと。なお今号では著者の姓の表記が揺らいているが (Siléniks, Syléniks)、一般には, Silenieks である。
- (7) エミール・ヨヨ『サン＝ジョン・ペルスと語り部』の意義については、グリッサンのサン＝ジョン・ペルス論との関わりにおいて以下で詳しく触れた。中村隆之「グリッサン、フォークナー、サン＝ジョン・ペルス——ポスト・プランテーション文学論の試み」土屋勝彦編『反響する文学』風媒社、2011年、60-89頁。
- (8) シュヴェロールのこの指摘は、グリッサンがセゼールよりもサン＝ジョン・ペルスを重視する理由と無関係ではないだろう。グリッサン、セゼール、サン＝ジョン・ペルスの詩語の水準における政治的なものの位相を考察するさいには避けては通れない指摘である。
- (9) オルティスへの言及は、原典への直接参照ではなく、ハースコヴィッツの以下のフランス語訳からの重用であることをエリザベットは注記している。Melville Herskovits, *Les bases de l'anthropologie culturelle*, Payot, 1952.
- (10) なお「アキュルチュラシオン (acculturation)」(「文化変容」と通常は訳される) の概念は、シュヴェロールが第2号のフォークロア論のなかで用いていたことを想起しておきたい。つまりはIMEの討議をつうじて「文化変容」よりもいっそう有効な概念として「トランスキュルチュラシオン」が参照されるようになったと考えるのが自然である。
- (11) 「マルティニックでは1960年代・70年代をつうじて、親フランス路線の右派政党と自治路線の左派政党との争いが続いていた。左派政党には、セゼール率いるPPM (マルティニック進歩党) を筆頭に、PCM (マルティニック共産党)、ジョゼフ・ラグロジリエールの創始したFSM (マルティニック社会主義者連名) が存在した。PPMとPCMは自治路線を掲げていたのに対し、FSMは左派政党では唯一海外県としての現状維持を掲げていた。／1971年8月16日から18日にかけて、各海外県の自治派の団体がマルティニックの山間の村モルヌ・ルージュ (共

産党系の村)に一堂に会した。(略)この「モルヌ・ルージュ協定」が目指すのは、フランス本土から政治面・経済面での一定の自己決定権を有する「自治」の獲得だった」(中村隆之『カリブ世界論』人文書院、2013年、304頁)

- (12) Glissant, *Le discours antillais*, *op.cit.*, pp.208-212.
- (13) この共同作業に加わったメンバーの名前が文章の末尾に注記されている。名字のアルファベット順に以下13名が記されている。ジュリエット・エロワ=ブレゼ、マリヴォンヌ・シャルルリー、ベティー・ドゥカトレル (Betty Decatrelle)、エクトル・エリザベット、イヴォンヌ・フォンテーヌ (Yvonne Fontaine)、ユベール・フォンテーヌ、ジョルジュ・グアネル (Georges Guannel)、マリーズ・グリッサン、エドゥアール・グリッサン、マルレーヌ・オスピス、ジェラール・プティ=フレール (Gérard Petit-Frère)、レイモン・サルダビ (Raymond Sardaby)、ジョジアヌ・サンプリ (Josiane Saint-Prix)。なお、マリーズ・グリッサンの結婚前の名字がオスピスであること、したがって『アコマ』の重要な寄稿者であるマルレーヌ・オスピスはマリーズの義姉妹であることや、ロラン・シュヴェロールもまたグリッサンの元義兄弟であることなどが、2018年2月出版のフランソワ・ヌーデルマンのエドゥアール・グリッサン伝によって明らかにされている。François Noudelmann, *Édouard Glissant : l'identité généreuse*, Flammarion, 2018, p.223. この著作によりグリッサンの人生に関する事実が明らかにされており、グリッサンの交流関係について、特に幼少期を中心にこれまでの研究者が知りえなかったことが示されている。ただしヌーデルマンの伝記では具体的な典拠がおよそ示されないまま、グリッサンの人生が再構築されている。この伝記の研究面での寄与は留保しつつも、おそらくは証言にもとづく様々なエピソードが示されていることは興味深く、IMEと『アコマ』にかんする記述においても参考になる部分がある。
- (14) Glissant, *Le discours antillais*, *op.cit.*, pp.363-381. 大きな変更点としては「7分析」の項目に具体的な事例が加筆されている点、また雑誌初出時には掲載されていた図の1つが収録されなかった点が挙げられる。
- (15) *Ibid.*, pp. 381-389. この原稿では初出掲載時の2つの図が割愛された代わりに、末尾に1972年にシュフランのもとをグリッサンが訪れたさいのエピソードが『カリブ海序説』のほうでは新たに付け加えられている。
- (16) *Ibid.*, pp. 389-391. 最初の一文が割愛された以外では本文には異同はないが、13名のメンバーの名前が記された注記は「マルティニク学院グループの有志による」と簡略化されている。なお『カリブ海序説』の96の章のうち、「(代表イデオロギーについての覚書)」のように、表題が丸括弧でくくられているものは3つある。

- (17) Bernard Diederich et Al Burt, *Papa Doc et les Tontons macoutes : la vérité sur Haïti*, Albin Michel, 1971.
- (18) アンセルムによれば、フィニョレは非常に話術に長けた政治家であり、人気を博したという。1957年、臨時大統領となるが、その20日間後にフィニョレが直々に参謀長官に任命したアントニオ・ケブロー (Antonio Kébreau, 1909-1963) のクーデタにより失脚し、軍機でマイアミに追放された。
- (19) 以下、アンセルムはデュヴァリエ主義の分析に関して、デュヴァリエ自身の次の著作から引用をしている。François Duvalier, *Œuvres Essentielles tome 1 : éléments d'une Doctrine*, Presses Nationales d'Haïti, 1968. 本書は全4巻から成り、アンセルムが引用する第1巻はデュヴァリエの民族誌学的論文と著作、医学論文を中心に収録されており、大型の判型(縦24.2×横17cm)で全829頁からなる(第2巻以降は大統領になるまでの過程および大統領就任後の政策をめぐる記事と演説を中心に編まれている)。本書はデュヴァリエ自身がみずからを讃えるために出版したことは明白であり、裏表紙には「本書は現世代から次世代以降の人々までの教育に寄与することになる」と書かれている。
- (20) そうした知識人は欧米の報道からデュヴァリエにきわめて否定的だと考えられるからだという。アンセルムはここでグリッサンが『アコマ』1号に掲載した「心的不均衡の社会的＝歴史的諸基盤への導入」を参照しつつ、マルティニックの歴史が不連続だと捉えるIMEのような知識人のあいだでは、デュヴァリエ主義的発想が成り立ちえないことを確認している。

付記 本論は、研究課題15K16716の成果の一部をなしている。

